

高松城(玉藻城)(国の史跡, 百名城)(高松市玉藻町)(玉藻公園)

別名「玉藻城」は、万葉集で柿本人麻呂が讃岐国の枕詞に「玉藻よし」と詠んだことに因み、高松城周辺の海域が玉藻の浦と呼ばれていたことに由来するとされている。

高松城は、豊臣秀吉の四国制圧の後、天正15年(1587年)讃岐1国の領主となった生駒親正によって、「野原」と呼ばれた港町に築かれた。現在見られる遺構は、江戸初期に徳川光圀の兄で常陸国から12万石で高松に移封された松平頼重によって改修されたものである。

近世城郭の海城としては、最初で最大の例で、「讃州さぬきは高松さまの城が見えます波の上」と謡われている。本丸に建てられた天守は、最下重が萩城や熊本城の天守のように天守台より出張り、最上重が小倉城や岩国城の天守のように「唐造り」であった。その様子は、解体される以前に写真におさめられ、また1884年にイギリスの週刊新聞「ザ・グラフィック」でイギリス人のヘンリー・ギルマールの絵によって紹介されている。

現在は、三重櫓や門など一部の建物と一部の石垣、堀が現存し、城跡は「玉藻公園」として整備されている。

安土桃山時代

天正15年(1587年)生駒親正が讃岐国17万6千石の大名に封ぜられ引田城に入城する。

同年、引田城は手狭であったので聖通寺城に移る。

天正16年(1588年)聖通寺城でも不便を感じ、香東郡篁原庄玉藻浦に高松城の築城を開始する。

天正18年(1590年)高松城完成。

江戸時代

寛永16年(1639年)生駒氏4代・高俊、生駒騒動により出羽国矢島藩1万石に転封となる。

寛永19年(1642年)水戸藩初代藩主・徳川頼房の子の松平頼重が12万石で入封。城の整備に着手する。

2代頼常にも改修が引き継がれる。

正保元年(1644年)頼重、城内の飲料水確保のため水道を造り、城下の亀井・大井戸・今井戸より水を引く。

寛文9年(1669年)小倉城を模した3層5階の天守が完成。

同年、頼重隠居。隠居所として城の南西に栗林公園を造築する。

寛文11年(1671年)松平氏による城の大改修が始まる。

城郭の形式は輪郭式平城で、本丸を中心に二の丸、三の丸、北の丸、東の丸、桜の馬場、西の丸が時計回りに配置され、3重に堀が廻らされていた。かつては城壁が瀬戸内海に直接面し、外濠・中濠・内濠の全てに海水が引き込まれ、城内に直接軍船が出入りできるようになっており、水軍の運用も視野に入れ設計されていた日本初の本格的な海城である。縄張りは黒田孝高(よしとか)が手掛けたといわれ、細川忠興、小早川隆景、藤堂高虎などによるとも言われている。高松城をはじめとする海城は海上封鎖が難しく、水攻めや水断ちといった攻城手段が使えないため戦争時の籠城や物資の搬入、脱出ができ、近世の縄張りとしては有利であった。

しかし、版籍奉還以後廃城になった高松城は明治以降の都市化の波に吞まれ、現在では海側に新しい道路(水城通り)が通り、ほとんどの建物が取り壊され、内堀と中堀の一部を除いて埋め立てられている。最盛期には66万㎡(約20万坪)あった城の総面積も、現在では約1/8の7万9587㎡(約2万4千坪)にまで減少した。しかし現在でも外堀と内堀には海水が引き込まれており、往時の名残を残している。そのため、堀には牡蠣などの貝が生息し、養殖の鯛も放流されている。

Wikipediaによる

